

# ものいわぬ日本を、 如何に外国に伝えるか。

斎藤 禎

(元編集者 国基研理事)

## (一)

「マー君 神の子 不思議な子」、古くは「神様 仏様 稲尾様」、とスポーツの世界では超人的な活躍をする選手を神様として称えてきた。

朝な夕な、仏壇と鴨居の上にしつらえられた小さな白木の神棚に手を合わせる私は、はたして、信心深い人間なのだろうか。

平川祐弘氏は、本著『神道とは何か 小泉八雲のみた神の国、日本』を一冊の「ブックレット」と表現するが、「小冊子」というには、だいぶ手ごわい。

平川氏と牧野陽子氏の手になるこの本は、四六軽装判であり、たしかにブックレット的な様をなしている。

「日本語と英語で読む」と表紙カバーに小さく朱書されているように、平川氏分の日本語本文は七十七ページ、大要を英語で表現した部分が六十六ページ、牧野氏の執筆部分は日本語による本文が四十六ページ、英語部分が四十四ページであり、平川氏による「はじめに」から、ページを繰って、扉ページ、日本語と英語による目次、平川氏の日本語原稿、牧野氏の日本語原稿、牧野氏による「あとがき」、おふたりによる英文での原稿、奥付等をあわせると総計二百五十二ページにもなるが、本の体裁から受ける印象からすると、たしかに「ブックレット」である、といえるの

かもしれない。

おふたりの日本語原稿部分のみを抽出すれば百二十ページ余のこの「ブックレット」に登場する人物は、主人公小泉八雲はもちろん、八雲の親友であり、すぐれた日本研究者であったバジル・ホール・チェンバレンをはじめ登場順に数えていけば、D・C・ホルトム、エドウィン・ライシヤワー、マツカーサー、松尾芭蕉、片山哲、横光利一、R・H・ブライス、山梨勝之進、フュステル・ド・クーランジュ、本居宣長、平田篤胤、佐伯彰一、昭和天皇、フォード米大統領、福沢諭吉、内藤鳴雪、駐日公使パークス、ヘボン、サトウ、渋沢栄一、ウイリアム・ジョージ・アストン、小泉節子、柳田国男、テオクリトス、ハーバート・スペンサー、キケロ、穂積陳重、穂積八束、中川善之助、岡村司、W・B・イエイツ、アラン、聖徳太子、ダンテ、明治天皇、濱口五兵衛、シューベルト、ゲーテ、佐々木喜善、新谷尚紀等々（表記は本文による）、五十二人にもぼる。

一冊の「ブックレット」であるうとも、今、神道について語ろうとすれば、これだけの数の人々が必要ということだろう。

## (二)

本書は、日本とアイルランドの外交樹立六十年を記念して、平成二九（二〇一七）年六月に明治神宮で行われた講演会を基としている。

小泉八雲の日本名で知られるラフカディオ・ハーン之父はアイルランド人であり、母はギリシヤ人だった。

この日、平川氏は「小泉八雲と神道——ギリシヤ的解釈とアイルランド的解釈」、牧野氏は「ラフカディオ・ハーンがとらえた神社の姿——“A Living God”を手がかり」と題する講演を行った。

当日の三百名を越える聴衆の中には、駐日アイルランド大使ほか少なからぬ外国人が参加していた。そのためもあって、同時通訳者が派遣されていた。

ここから、根本的な問題が発生する。

講演後、テープにとられた録音を聞いた平川氏は、愕然とする。同時通訳者の英語の文脈が理解できず、確実にわかったのは、当日参加者に事前に配布されていたハンドアウト（資料）から引用された英文のみであった。

平川氏はいう。

「同時通訳が難しい仕事であることは私どもも職業柄承知していたが、まさかこれほどとは思わなかった。当日、イヤホーンで聴いた外国人傍聴者は二人の日本人の講演内容の程度の低さに慥然としたことである。」

さらに、平川氏は核心を突く。

「しかしこれはなにも当日の通訳の能力に特に問題があったというのではなく、世間は知らないかもしれないが、それが今日の日本の対外発信力の実情なのである。(略)日本は戦前・戦中・戦後を通して、しばしばものいわぬ大国として誤解されてきたのである。とくに日本固有の宗教である神道は外国でしばしば誤解されてきた。このような様で放置はできないと思っただ。」

この発言に、明治神宮での講演を講演のままにしておか

ず、きちんとした形でまとめておこう（しかも日本語と英語の両方で）という強い意図がうかがわれる。

日本語による講演の原稿では、平川氏は、はじめの三分の一強を「西洋人の神道理解と誤解の歴史」を論ずることにあてていたが、この部分を、新たに *Changing Western attitudes toward Shinto* として英語で書き下ろすことにした。

「ブックレット」のためにまず英文を書き、そのちに改めて日本語にしたのである。

だから、「日本語と英語で読む」と謳いながらも、この「ブックレット」では、日本語と英文は完全には一致していない。逐語訳ではないのである。これは、牧野氏の場合も同様で、外国人のために時に英語による説明を書き加えている。

しかし、そのような努力を重ねても、日本をまっとうに理解してもらおうという問題の解決はむずかしい。

平川氏は、本文中でこの難題について何度か論じている。たとえば、日本人が持つ神道的な感じを示唆したとみられる内藤鳴雪の句、

元旦や一系の天子不二の山

を、第二次世界大戦の日米対決を避けようと腐心し、日本文化、さらに俳句の研究者であったR・H・ブライス教授は、

The First Day of the Year:

One Line of Emperors:

Mount Fuji.

と訳したが、平川氏は、「この英訳を読んでも、これまでの生活体験が異なる外国の方の多くは日本人と同じ感情を共有することは難しいかもしれません。」と率直な感想を述べている。

### (III)

「ブックレット」では、平川氏執筆部分の『小泉八雲と神道』は、第一章「西洋人の神道観の変遷」(Changing Western attitudes toward Shinto) から始まる。

この章の最初の数ページを読むだけで、なぜ神道が西洋人に誤解されるに至ったかへの回答が、すでに用意されているといつてよい。

西洋人にしてすぐれた日本研究者として、小泉八雲とバジル・ホール・チェンバレンが登場する。

西洋人による神道理解へのふたりの役割について、平川氏は簡明に述べる。

「ハーン(小泉八雲)は日本人の霊の世界に興味をもち日本固有の宗教である神道の価値を発見した人と言われます。チェンバレンは第二次世界大戦前、西洋日本研究の群を抜いた権威ある大御所でしたが、彼は神道にたいしてきわめて否定的な裁断を下していました。この二人は当初はたがい敬愛する仲でしたが、その友情が後に破れたのは、一つにはこの日本の土着の信仰に対する評価の著しい懸隔に由来したといつてもよいでしょう。」

ふたりの神道観が対蹠的に語られる。

平川氏は、チェンバレンの名著『日本事物誌』から、

「神道は、しばしば宗教と見做されるが、ほとんど宗教の名に値しない。(略) 人々の心を動かすにはあまりに空虚であり、あまりに実質に乏しかった。仏教に比べて神道はそれ自体の中に深い根を持つものではなかったのである。」

の部分を引用している。

明治の末に三十年余の日本滞在を切り上げて英国に帰ったチェンバレンは、帰国するや「神道は天皇崇拜の忠君愛国教」であると発表し、その後の第二次世界大戦に至る西欧社会での神道批判の中心的な概念のもとをつくる。

チェンバレンは『古事記』の翻訳者でもあった。この日本語にだけた一流学者の影響力は大きい。平川氏はいう。

「明治初年には、『あまりに空虚で』『人の心を動かさない』と認定されたはずの同じ神道が、七十年後の一九四四(昭和十九)年には、日本の狂熱的な愛国的国家主義のバックボーンであると認定されたのです。

God Emperor の日本の天皇崇拜を中心とする信仰体系がとくに西洋キリスト教文明社会の敵役とされたの

は、その年の秋からフィリピンで、ついで、沖縄で、日本の神風特別攻撃隊が出動したからです。」

戦争中に「国家神道」という言い方はなかった。「国家神道」は戦後になって、つまり敗戦後に英語の State Shinto の訳語として日本語に定着した。

平和はもちろん貴い。

竹山道雄は、その最晩年に月刊誌の『文藝春秋』に随筆のページを持っていた。そこで、「ヨーロッパ文明が最高の文明であり、その心棒になっているのがキリスト教である」と語ったのちに、

「だが、何となく違和感もあった。キリスト教のゴツドは、妬み、憎み、亡ぼす。一神教はおれがおれがと我を立てて、絶え間なく戦乱をつづけた。(略) 自分が、自分だけが、神の真理を体しているのだが、他教徒はそれに背くから、異教徒は悪である。」(『文藝春秋』昭和五九年六月号)

と続けた。

そのころ、私（斎藤）は、編集者として山本七平の担当をしていた。宗教関係の書物を多く出していた山本書店の経営者だったが、フラウイウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』も山本書店の刊行だったから、『ユダヤ古代誌』を手にした時のことを覚えている。

『ユダヤ古代誌』のなかでは、神、預言者を同じくしない異教徒は戦いに敗れると、王以下すべての民は徹底的に征伐される。虐殺、撲殺というおどろおどろしい文字がいたるところにあった。平和の宗教という通り一遍のものではなかったのである。

#### (四)

戦後日本は、マッカーサー元帥率いるアメリカ軍を中心とする占領軍に占領された。

平川氏が当時をふりかえって、

「アメリカの軍人政治家には交戦国の宗教を尊重せねばならない、などという考えはあまりなかったに違いない。（略）巨視的に見て、そんな宗教文明史的な下

地があつたうえでの占領政策でした。それだから、日本が二度とアメリカの脅威となることのないように、日本の神社神道に対しては厳しい措置をとりました。日本のフアナティズムの背骨を骨抜きにしなければならぬ。それで日本降伏後四カ月、占領軍の指令とせられたのです。」

と述べている。

占領軍が日本陸海軍の残存兵力を極度に恐れたことは、尋常でなかった。アメリカは、「物的武装解除」に加えて、「精神的武装解除」をいっそう進めることを公言していた。<sup>2</sup>小説の神様といわれた横光利一は、日本文明の特筆を説明するために、戦後すぐに発表した『旅愁』第四篇のなかでハーンを引用している。

「ラフカディオ・ヘルンというギリシヤ<sup>マ</sup>人で、明治の三十七、八年ごろの晩年に、日本の現在を社会進化の状態として見ると、キリスト生誕前四、五百年のころの西洋と同じだと云っているのです。」

と書き、こう続けた。

「日本の神道に流れている道德こそ世界最高の道德で、今にこの道德のために世界の国々は美しくなるだろうと云って死んでいるのですよ。ところが、このヘルンが日本で見た道德というのは、みそぎを中心としたものなんです。ギリシャもローマも、一番精神の健やかな時代には、日本のみそぎと同じものを、やりやっていたと書いてあるんですよ。」

このくだりが、神道指令と並ぶ占領軍の対日強硬姿勢の表出であった検閲に見事に引つかかる。戦後に刊行されたいわゆるGHQ本（占領軍の検閲済みの本を指す）には、横光のこの数行は、跡形もない<sup>3</sup>。

この検閲例を見ても、占領軍におけるハーンの位置は、チェンバレンのそれと比べると極度に低いとしかいえない。狂信的な日本主義者として、警戒されているといつてもいいだろう。

いみじくも横光がハーンを思い浮かべつつ『旅愁』で述べた、神道の世界と古代ギリシャ文明の相似について、平

川氏は「ブックレット」のなかで次のように書いている。

「ハーンの伝記作者の多くがハーバート・スペンサーの感化を浴びたといいますが、この英国の哲学者に劣らず大切な存在は、フュステル・ド・クーランジュ（一八三〇—一八九九）でした。一八六四年に『古代都市』(La Cité Antique)を出し、名著として聞こえました。古代都市とは、狭義にはキリスト教以前の地中海周辺の都市国家です。」  
地中海世界でも善人も悪人も死んだら神様として祀った、と説くクーランジュに、平川氏は、

「『古代都市』を読んでいると、本居（宣長）や平田（篤胤）の書くものと似ているので、なんだか神道の死生観の説明を聞いているような気がします。」

という。

クーランジュについては、この「ブックレット」の後半部分で、共著者の牧野氏も語っている。牧野氏によれば、

「（ハーンとクーランジュの先祖崇拜では）、ただ一つ違う点があります。それは、死者の霊はこの世のどこ

に残るのか、という点です。フュステル・ド・クラ  
ンジュは、『古代においては、人は死者は墓の中で生  
き続けると確信していたため、必要とされる品々——  
衣服、道具類、武器などと必ず一緒に埋葬した』、『墓  
のない霊魂は住む場所を失ない、不幸になってさま  
よい続け、悪事をはたらく』と考えましたが、ハー  
ンは『日本——一つの解明』(Japan: an Attempt at  
Interpretation)のなかで以下のように記しています。』

と、ハーンの文章をあげ、訳している。

*Their bodies had melted into earth; but their spirit-  
power still lingered in the upper world, thrilled its  
substance, moved in its winds and waters.*

死者の肉体は土と化しても、その霊の力は地上に留  
まっており、それが地上の物質をかすかに震わせ、風  
や水の動きと化するのである。

ハーンの先祖霊は、風となり、水となり、自然のなかに、  
日本の里山のなかに溶け込んでいるのである。ハーンは来

日すると出雲大社などの有名な神社を詣でているが、牧野  
氏は、

むしろ名もなき神社の描写に彼の特質が出ているとい  
う。

ハーンは神社が持つ雰囲気が好きだった。その性向を表  
現したものとして、牧野氏は、『旅の日記から』(From a  
Traveling Diary)の数行をあげる。

*Of all peculiarly beautiful things in Japan, the  
most beautiful are the approaches to high places of  
worship or of rest. — the Ways that go to Nowhere  
and the Steps that to Nothing.*

数ある日本独特の美しいものの中でも最も美しいの  
は、参拝のための聖なる高い場所に近づいて行く道で  
ある。それはいわば、無に通じる道、無に至る階段で  
ある。

*Nothing & Nowhere*が大文字になっている。

牧野氏はいう。

「Ways and Steps をも大文字で記す」ことによって、『無』に至る道、つまり宗教的な道程としての神社の参道に美を見出していることです。(略) ここにみられる精神の動きは、いふなればふっと力が抜ける感じではないかと思えます。高みへとのほり、その到達点に極まるのではなく、ふっと力みが取れて沈んで、緊張がほぐれていくような感じかと思えます。」

ハーン の 作品 『生 神 様』 (A Living God) は、三 部 構 成 の 短 篇 だ る。

第三部は、天津波の襲来を村人に知らせるために刈り取ったばかりの稲束に惜しみもなく火をつけたという、かの有名な濱口五兵衛の逸話である。

第一部、第二部は神社をめぐる話が主だが、牧野氏は、ハーンが感じた日本の神社の特質を次のように説明する。

「(神社は) ただ古いだけの原始的な小屋ではないのはもちろんのこと、よくいわれる、自然との親密な関係<sub>レ</sub>をあらわすというのでもない。ハーンが描くのは、屋根の勾配の非常なきつさ、永遠に閉ざされた扉、直

角に交わる角材、そして高々と聳え立ち、fantastic というほど、天へ立ち上がる千木ちぎの直線なのです。直線、直角、鋭角、鏝こ(中世の兜の面頬に似た格子の隙間)、天への志向。ハーンはまず神社建築の人為性を指摘します。そこに、手つかずの、自然<sub>レ</sub>とは対極的な人間の意志を見る。(略)『彩色』されない『白木』と『陽』にさらされた結果、木々と岩と同じように景色のなかに溶け込んでいる。」

このような形をとった片田舎のお社こそ神社の本質だとした、ハーン の 驚 く べ き 観 察 力 が あ る。

ハーン の 描 写 は、私 (斎藤) に 名 も な き 小 さ な 神 社 を 思 い 起 こ さ せ る。

父親のシベリアからの帰還が遅く、私は学校に上がるまで霞ヶ浦のほとりの母親の実家で祖母と暮らした。今でこそ、村の小さな神社とすることができが、子供心には、古びた石の鳥居、茅葺のくすんだ本殿と拜殿があり、杉、檫あしの木に囲まれている明神様と呼ばれていた神社は静まり返り、近寄りたかつた。年に一、二度、岬の向こうから街道を大八車に衣装や大道具、小道具を積み、幟を押

し立ててやってくる旅芸人一座の興業の日だけが明るかった。芝居の翌朝、前夜の興奮おさまらず明神様に行つてみると、早くも一座は次の村を目指して舞台の撤収にかかつていた。呆けた目で眺めていると、「そんな顔していると、人攫いに連れていかれるよ」と祖母に連れ戻された。

## (五)

ハーンの父はアイルランド人である。

アイルランドは、ギリシヤ、新聞記者として働いたフランス領西インド諸島に劣らず、日本の神道を解釈するうえで、ハーンに大きな影響を与えた。

平川氏は、

「ハーンとアイルランドの関係が重要視されるようになったのは近年です。ハーンは験の母と生き別れたことが生涯トラウマとなった人で、その原因となったアイルランド人の父親を憎んだ。(略)しかし五十を過ぎた頃から自分はアイルランドで幼年時代を過ごしてそのことが血となり肉となつていることに気づき始めます。フェアリーがたくさんる ghostly Ireland の感化を一心に浴びて育つたお蔭

で ghostly Japan 霊の日本も共感をもつて解釈することができたのだ、とさとした節がある」

と述べ、さらに、ハーンがアイルランドの大詩人イェイツに宛てた一九〇一(明治三四)年の手紙を引用する。

「——四十二年前、私は恐るべき小さな子供でした。ダブリンのアッパ・リーソン街に住んでいました。私の乳母はコンノート地方の出で、私にフェアリーの話や怪談を聞かせてくれた。そうです。それだからわたしはアイルランドの事が好きでなければならぬはずだ。そして事実好きでたまらないのです。」

牧野氏は、ハーンの東京帝国大学での講義の内容を述べる。

「妖精 fairy とは、spirit 霊を意味する言葉であつて、fairy という英語も同じだと説明しています。そしてアイルランドには、妖精が人間をこの世から妖精の国に連れ去るといふ伝承があり、妖精に連れて行かれると、『その人は死に、魂は妖精になる。You die and your

soul becomes a fairy』と信じられてきたのだと言います。そのような妖精の物語を語る詩人のなかでも最もすぐれているのが、ウイリアム・バトラー・イエイツだと名をあげて、ハーンはその作品を紹介しています。」

牧野氏はまた、イエイツの詩とハーンの商品とのあいだの受ける印象についても、語っている。

「ただ、異なるのは、二つの風の歌の調べでしょうか。ハーンの里山を吹き抜ける風が、初夏の青空のもと、明るい長調の喜びの歌であるのに対して、イエイツの妖精の歌は、月夜の世界のように、どこか哀愁をおびて幻想的な短調の響きなのです。」

日本民俗学の創始者とされる『遠野物語』の柳田國男<sup>5</sup>は、ハーンとイエイツをよく読んでいた、といわれる。

さて、平川、牧野両氏が語った小泉八雲を中心とする先人たちによる日本のなつかしい物語への拙い感想を終えるにあたって、ふたたび、平川氏がこの「ブックレット」の

「はじめに」で指摘したところに触れざるを得ない。

日本の対外発信力についてである。

外国文化の吸収については解決されていると思われるが、日本の対外発信力という難問は厳として存在する。ものいわぬ大国日本という難問である。

たしかに、西洋とは何か、日本とは何かを日本人はずっと問い続けてきた。

占領軍の検閲にあった横光利一の『旅愁』もそうであった。昭和六十年に発表された立原正秋の『帰路』もそうである。『帰路』には、エピグラフとして陶淵明の「行き行きて帰路に循い 日を計えて旧居を望む」があげられており、『旅愁』を多分に意識している。

『旅愁』の主人公は、歴史学を研究しているらしい。『帰路』の主人公は美術商である。両作とも作中、東西文明について、神道および日本文化の特筆について登場人物たちの喧喧囂囂たる議論が展開される。しかし、不思議にも議論は、たとえパリにいても、日本人同士のなかだけで展開される。フランス人やアメリカ人は、背景として存在するも、議論には加わらない。『帰路』の主人公は、立原一流のサービスピ精神の発露であるが、スペインで知り合った美術史を

学ぶアメリカ人女子学生と何度もベッドを共にするが、テーマである日本についてふたりが語りあったりはしない。『旅愁』も『帰路』にも、カトリック教徒の親しい日本人女性が登場する。宗教の違うカトリック教徒との結婚に考え込んだりするが、しかし、これも日本人のなかだけの話題である。横光も立原も、留学ではなく旅行者としてヨーロッパに行っているのが、それがその理由なのだろうか。

さらに時代が下って、二〇〇四（平成一六）年には、海老沢泰久が『青い空 幕末キリシタン類族伝』を上梓し、幕末、維新のキリシタン類族の青年を追ったが、外国人は冒頭にフランシスコ会の宣教師の名があるだけである。

横光にしても立原にしてもものいう外国人が小説の中に登場しない理由として、語学（言葉）の問題があったのかもしれない。しかし、それ以上に、神道をはじめとする日本文化を外国人に説明するとしてもするだけ無駄だという諦観めいた気持ちがあったのではないか。外国人に説くより日本人同士で議論をはてしなく深めた方が得策だと思っていたのではないだろうか。

簡潔で流麗な文章を書いた海老沢は、死の前、日本の家電製品のマニュアル（使用説明書）の日本語が難解できわ

めてわかりにくいといっていた。マニュアル通りにやろうとすればするほど迷宮に誘い込まれると嘆いていた。いつか書き直してやろうとも語っていた。外国人向けの外国語によるマニュアルも、たぶん、同様だったろう。しかし、世界に冠たる当時の日本の家電なら、外国語マニュアルがたとえ不備であっても、製品が言葉を凌駕して、説明書はそのまま通用していたに相違ない。

文化や宗教の場合はそうはいかない。現在の日本には、神社が約八万、仏教寺院が約七万、キリスト教会が約三千ある、という。この数字を見れば、私たちは神道に口をつぐんではいられない。

平川氏と牧野氏の共著『神道とは何か 小泉八雲のみた神の国、日本』は、三度読むべきである。まず、日本語の部分で、私たちと神道とのかかわり合いを再認識するために通読する。ついで、英文の部分で、外国人の神道理解を意図しながら読む。三度目は、日本語と英語を突き合わせながら読んでみる。ものいわぬ大國日本から脱するためのこれこそ三服の妙薬であり、絶好の「ハンドブック」となるに違いない。

1 本書は、二〇一八（平成三〇）年に錦正社から刊行され、英文のタイトルは、'What is Shintō? Japan, a Country of Gods, as seen by Lalcadio Hearn' 執筆者紹介欄に、

平川祐弘 一九三二年生まれ。東京大学名誉教授。比較文化史家。著訳書に『ルネッサンスの誌』、『和魂洋才の承譜』、『ダンテ』、『西欧の衝撃と日本』、『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』、『竹山道雄と昭和の時代』、『西洋人の神道観』。十八巻本『平川祐弘著作集』は勉誠出版から刊行中。

2 一九四五年九月二日付同盟電による、アメリカのバーンス國務長官の発言。

3 岩波文庫版『旅愁』（二〇一六年刊行版）に、編集部作成の興味深い資料がある。占領期に刊行された『旅愁 全』（改造社版、いわゆるGHQ検閲本）と横光の元原稿を比較した『旅愁 全』との主な異同箇所（引用は、新字体・現代仮名遣いに統一されている）が、それである。これによると、このハーンに関する部分は、占領軍から厳格な検閲を受けたのち、それでも刊行したいという出版社の意向に沿って、まったく違うシチュエーションに書き替えられている。

江藤淳は、『一九四六年憲法——その拘束』で、現行憲法が占領軍によって起草され、しかもその起草の事実が徹底的に秘匿されたことを書いた。この調査のため赴いた米メリーランド大学図書館ゴードン・W・プランゲ文庫で、小林秀雄に懇話されて執筆し、雑誌『創元』第一輯（昭和二十二年発行）に掲載されるはずで

あった吉田満『戦艦大和の最後』（『創元』での表記）の校正刷りを発見している。検閲によって掲載中止となった校正刷りには Suppress（掲載禁止）と大書され、「失われた偉大な戦艦に対する深い哀惜の念……」という検閲官の長文の意見書（感想）が添えられていた。英文によるその内容は正確な文章であり、アメリカ人（？）検閲官の日本語の能力の高さに、江藤自身が感嘆している様子うかがえる。

『旅愁』に戻れば、占領軍の検閲の経過、結果について、十重田裕一氏は、『文学』（二〇一六年一一、一二月号）などで詳述している。「帝国日本時代の、出版法（一八九三年公布）・新聞紙法（一九〇九年公布）に基づく内務省の検閲とともに、横光が翻弄されることになったのは、アメリカ占領軍によって実施された、GHQ/S CAP（連合国最高司令官総司令部）の検閲である。横光の戦後の活動期間は、一九四七年（昭和二二）一二月に死去するまでわずか二年余にすぎず、敗戦の失意の中で寡作であったが、占領軍によって実施された検閲とかかわる運命を否応なくたどることになったのである。」（同論文）

検閲をどう乗り越えるかは、作家のみならず出版社そのものの存亡にかかわることであった。関心のある方は、前出の、岩波文庫版『旅愁』にある『旅愁 全』との主な異同箇所をご覧ください。支那→中国、日支→日華などの書き替えは当然予想されるところだが、文庫の（上）（下）あわせて五十八ページにわたって、占領軍の検閲の実態が紹介されている。目を疑うような大幅な書き替えもある。これを横光自身による推敲の結果、というわけにはいかないだろう。検閲に加えて、左翼寄りの知識人から国粋主

義者と言いついて立てられた横光の失意はいかばかりであったろうか。

4 古代の建築で、屋根のむねの両端にX字形に交差させた長い木材（新明解国語辞典）。両国国技館の土俵の上の屋根にも見ることができると。

5 柳田國男の原稿も占領時代の検閲にあっている。たとえば、江藤淳「『氏神と氏子』の原型」（『新潮』一九八一年一月号）など。

6 海老沢泰久は、一九五〇（昭和二五）年茨城県生まれ、二〇〇九（平成二一）逝去。國學院大學卒業。同大学折口博士記念古代研究所勤務ののち、作家として独立。『帰郷』で直木賞受賞。主な作品に、『F1地上の夢』、『監督』、『美味礼讃』など。キリシタン類族とは、「江戸時代、キリシタンを奉じた者の一族七世までの称」（日本国語大辞典）。